

優秀賞

家族と考える保険

愛知県 刈谷市立朝日中学校 三学年

高橋 一夏

「ここに五百円玉置くよ。ちゃんと払ってね。」

そういつて母が弟にバスケットボールの体験レッスンの保険代を渡した。すると弟が、

「ケガしなかったら、この五百円って返ってくるの。」と聞いた。

「こういうのは、掛け捨てっていつて返ってこないの。でも、もしケガをしたら給付金が支払われて助かるんだよ。」

と母が教えていました。テレビコマーシャルでも多くの保険が紹介されているが、私は今まで保険といたらどれも同じものだと思っていた。

「ねえ、私に保険って掛けてあるの。」

という言葉が思わず口からとび出した。

「もちろん、でも学資準備のための保険だけだね。」

「生命保険と何が違うの。」

私は、矢継ぎ早に母に質問をした。どうして保険が必要なのか。どんな種類のものがあるのか。どんなときに、どうしたらお金が手元に入ってくるのか。母は、時々困った顔をしていたが、それでも私にわかりやすいように説明してくれた。コマーシャルの楽しいイメージとちよつと違って、現実が私に迫ってくるような気がした。これから先、私が大人になっていくために、様々な場面でお金が必要なのがわかってきたからだ。けれどもそれは、両親が健康でしっかりと働くことができれば不自由なく用意できるのだろうが、何か一つでも歯車が狂ってしまえば……。結果は容易に予測できた。

「じゃあ、保険に入りまくればいいの。」

「バカねえ。保障が大きくて保険金が高額なものに入れば、保険料だって高くなるんだよ。」

「えっ。そうなの。」

何だかよくわからなくなりました。そんな私を見ていた母が、我が家が入っている保険を一つひとつ紙に書き出して説明してくれた。話を聞いていると、やみくもに保険に入っているのではなく、両親の将来設計をもとに、私たちが子どものことを考えて、保険という「商品」を選んでいるんだということがわかってきた。

第54回中学生作文コンクール

お金を払っているのに、何事もなければお金が手元に戻ってこないことも、初めは損をしたような気分だったが、両親が支払うお金が保険会社の運用資金になり、困っている人に支払われることを知ると納得できた。

また、両親が私たち家族の将来を広く深く考えていることが保険の種類や内容から見えてきた。ちよつと照れくさい気もしたが、うれしかった。家族の誰か一人にでも何かあった場合、共倒れしてしまうのではなく、保険の支払いによって家族みんなを支え合えるようになっていくことがうれしかった。

高校受験を控えたこの夏、急に将来について考えることが多くなった。でも、「保険」のことを母と話したことで、普段、清掃や洗濯、食事の準備など身の回りの細かな世話だけでなく、もしものときに備えての「不安」からも守ってもらっていることがわかった。

母の説明を聞いても、よくわからないことがまだあるのだが、こうして「保険」をきっかけに家族で将来について話をしたり、考えたりすることが大切だと思う。形のない「商品」だけど、その時々で「保険」を選んでいくことで、「幸せな家族の足跡」を残していければいいと思う。